

今後、出来るだけ各群れを追跡して構成を明らかにして、餌付け群の増減期や飽和期の構成と比較をして、東丹沢の各群れがどのような変動期に当たるのか分析を試みたい。

計画：1-3

野生ニホンザル個体群に対する有害駆除の影響

羽山 伸一・小西 綾子
(日獣大・野生動物)

羽山ら(1991)は、有害鳥獣駆除で滋賀県においてオリ捕獲された野生ニホンザルの性・年齢構成を調査し、地域個体群からランダムに捕獲されていないことを明らかにした。

本研究では、福井県若狭地方でおもに射殺によって捕獲された野生個体を回収し、その性・年齢構成、繁殖状態、栄養状態などを分析し、有害鳥獣駆除が与える個体群への影響を考察する。

今年度は、30頭の個体を回収し、性および年齢区分を確認し、現在、絶対年齢および繁殖状態などを分析中である。

性別は、オス13頭、メス16頭、不明1頭であった。また、年齢区分は4才以下の個体が4頭、5才の個体が1頭、6才以上の成獣が25頭であった。

この結果は、羽山ら(1991)の結果よりもさらに成獣ならびにメスの比率が高く、個体群に対する捕獲圧のかかり方が、いっそう特定の性・年齢に片寄っていることを示している。

計画：2-1

兵庫県におけるニホンザル分布の実態調査

清水聡(福井県立大・看護短大)
三谷雅純(兵庫県立人と自然博・生態)
武田庄平(東京農工大・一般教育)

兵庫県のニホンザル分布については、清水と武田(準備中)によるアンケート調査から、その分布の概要が知られている。その内、豊岡市周辺の集団は、近年になってその存在が確認された、新しく出現した(移入した?)可能性の高い集団である。清水らは、現地における聞き込みを中心に、この集団の現在の観察可能域と農作物への被害状況の季節変化を調査した。

観察可能域は、豊岡市、城崎町、竹野町にまた

がり、およそ70kmにおよぶ。一回の観察頭数は常に数頭程度であり、集団は小さな集まりに別れて広域を広く移動していることが推定できる。また、農作物への被害は特定の作物に限定できず、この集団は作物が畑にあれば何でも食べるという行動を示す。ただし、イネへの被害は聞かなかった。また、多くの人がコザルの姿を目撃しており、現在のところ、一定の個体数復原力は保持しているものと思える。

豊岡市をはじめ、兵庫県但馬地方は積雪量の多いことで有名であるが、この冬の積雪のために元来はより海拔高度の高い地域にみられるブナ林が海拔300mほどから認められ、一方、谷沿いの植生はより海拔高度の低い地域にみられる植生が上部地域にも進出している。(ただし、豊岡市周辺では、人為的な影響からすでに潜在自然植生の照葉樹林は代償植生のコナラ林におき変わっている。)豊岡市周辺のニホンザル集団は、しばしば谷沿いを移動しているものと思えるが、彼らの土地利用はこのような但馬地方の植生分布に深い関係を持つことが予想できた。また、豊岡市周辺以外の但馬地方でも、人々は「サルは谷沿いに住む」という認識を持っており、今後、より具体的なニホンザルの土地利用と植生分布の関連は、重要な調査対象であると思える。

豊岡市周辺のニホンザル個体群をはじめ、但馬地方一帯のニホンザルは、いずれも小さな単位に孤立して分布しており、たとえ地図上でみる分布域は広く見えても、各集団の行動域が「異常に」大きいために、実際の個体数サイズはきわめて小さいことが予想できる。今後は、保全生物学的観点を取り入れた調査が必要である。

計画：2-2

大分県のニホンザルの生息分布および生息地の環境変化と猿害

長岡寿和(大分短期大学)

野生ニホンザルによる農林業作物への被害は大分県全域に及びつつある。そこで、大分県の野生ニホンザルの生息分布域と生息地の環境変化を年代ごとに調査している。

全国的なニホンザルの生息地の調査は1923年に長谷部言人がアンケート調査したものが最も古いとされている。このときの報告は岩野泰三〔に